

西ドイツ・オーストリアの大学体育施設およびオリンピック施設を訪ねて

著者	加藤 満, 北村 優明, 白佐 俊憲
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	19
ページ	153-168
発行年	1985
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001830/

海外研修報告

西ドイツ・オーストリアの大学体育施設 およびオリンピック施設を訪ねて

加 藤 満 北 村 優 明 白 佐 俊 憲

I は じ め に

このレポートは1983年3月20日～4月8日の20日間、報告者3名が「北海道女子短期大学海外研修規程」に基づく旅費支給を受けおこなった「中央ヨーロッパ3国の教育、体育およびオリンピック施設視察」の研修成果を報告するものである。ここでは紙面の関係でインスブルック総合大学、インスブルック、ガルミッシュ・パルテンキルキエ、そしてミュンヘンのオリンピック関係施設についてのみ紹介する。他の視察結果「自由ヴァルドルフ学校」「ペスタロッチ子供の村」についてはすでに本学¹⁾²⁾研究紀要に報告済みである。

中世ヨーロッパの大学の歴史は古く、オーストリアではそれよりやや遅く創立されている。インスブルック総合大学は、他のヨーロッパ諸国の大学よりそれほど長い歴史と伝統がみられないが、日本と異なる教育制度や特徴的な教育内容、そして合理的創意工夫された体育施設がある。オリンピック施設では、2回も冬季大会が実施されたインスブルック、ヒットラー全盛時に開催された歴史的な場所ガルミッシュ・パルテンキルヒエ、そして大会期間中オリンピック選手村でテロ襲撃事件が起ったミュンヘンなどである。

われわれは視察旅行前に日本で大学体育施設およびオリンピック施設のあるヨーロッパの都市について資料収集を行ない、旅行計画の作成について準備をした。オーストリアのインスブルックには総合大学があり、西オーストリア随一の大きさの体育施設も備っている。また、ここはオリンピック都市としても有名である。そのうえ、インスブルックから約160kmほど離れたところにガルミッシュ・パルテンキルヒエとミュンヘンが位置している。このようなことから、当地はわれわれの視察旅行の目的である関係施設が近距離内にあり、地理的条件もよく理想的な訪問地であった。

今回視察することができた施設とそれらの都市は、以下に示すとおりである。

- ① Sportanlagen der Universität Innsbruck
- ② Innsbruck : 1946年と1976年の2回、冬季オリンピック大会開催地（オーストリア）
Olympia Eisstation, Olympia Schisprungschanze Bergiesel
- ③ Garmisch-Partenkirchen : 1936年の冬季オリンピック大会開催地（西ドイツ）
Olympia Eisstation

④ München：1972年の夏季オリンピック大会開催地（西ドイツ）

Olympia Gelände

以下、見聞した概要を（帰国後文献で確認した点を含めて）紹介する形で述べる。

II インスブルック総合大学体育施設

インスブルックは西ドイツからアルプスを越え、イタリアのローマへ通じる街道とオーストリアの首都ウィーン、そしてスイス間を結ぶ主要幹線の交点に位置する小都市である。人口は約14万弱（オーストリアでは5番目の大きさ）である。インスブルックはチロル州の州都の中心となり、町はイン川に沿い古風な建物が多く点在し、北側・南側には2000m級の高い山々に囲まれた風光明媚なところである。大学はここに1校だけである。

インスブルック総合大学*の基礎は1562年5月12日にイエズス会の手により、ギムナジウム（Gymnasium）が創立されてからである。その後、1669年10月15日カイザー・レオポルドⅠ世（Kaiser LeopoldⅠ）が大学建設基金の設立を裁可した。1677年4月26日レオポルドⅠ世は伝統的な四学部からなる総合大学を創立する。その後宗教政策の改革のため大学組織が消滅したりした。戦後1977年には大学組織法施行により正式な学部が設置される。それらは神学部（Theologische Fakultät）、法学部（Juristische Fakultät）、社会学・経済学部（Sozial-und Wirtschaftswissenschaftliche Fakultät）、医学部（Medizinische Fakultät）、精神科学部（Geisteswissenschaftliche Fakultät）**、自然科学部（Naturwissenschaftliche Fakultät）***、土木・建築学部（Fakultät für Bauingenieurwesen und Architektur）、などの七学部であり、現在も同様に分かれている。

インスブルック総合大学の本部は街の中心部からやや南西寄りで、イン川沿いにある。大学の内部は大理石で造られており、非常に重々しい雰囲気の中で歴史を感じた。この大学はアメリカ合衆国のように大学キャンパスのなかにすべての学部や研究所がそろっているのではなく、町のあちこちに分散している。今回訪れた大学施設は本部から南西寄りで、そこから少し離れたインスブルック空港のフェルステン・ヴェック（Fürsten weg 185）にある。

学校における体育活動として体育施設設備は最も基本的な条件の一つである。そこで、われわれはそのような施設設備がどのように創意工夫されているか、また使用者の考えがどこまで最優先されているかに興味をもった。幸い同行者の一人が当大学体育施設内にあるスポーツ科学インスティテュート（Institut für Sportwissenschaften）の教授であるDr. フリードリッヒ・フェッツ（Dr. Friedrich Fetz）とコンタクトがあり、各施設設備を詳細に見学できた。インスブルック大学体育施設は1975年の夏の終わり頃に完成し、そしてすべての設備機能が働きは

* Leopold-Franzeus Universität Innsbruck
A-6020, Innsbruck/Tirol, Innrain str. 52 Austria

*** 大学組織法が施行されてから従来の哲学部は、人文科学系列から精神科学も自然科学部に分かれた。
体育学科は精神科学部に属している。

じめた。図1には、当大学の全体の施設（屋外・屋内運動場）の見取り図を示している。以下、各施設の説明を述べる。

1. 屋内体育施設

(1) 水泳プール

ここは温水プールである(写真1)。この施設には飛び込みプールも併設されている(写真2)。プールの大きさは25.0m×16.7mで6コースある。飛び込みプールは14.0m×10.2m、深さは

写真1 水泳プール



(2階の観覧席から撮影)

写真2 飛び込みプール



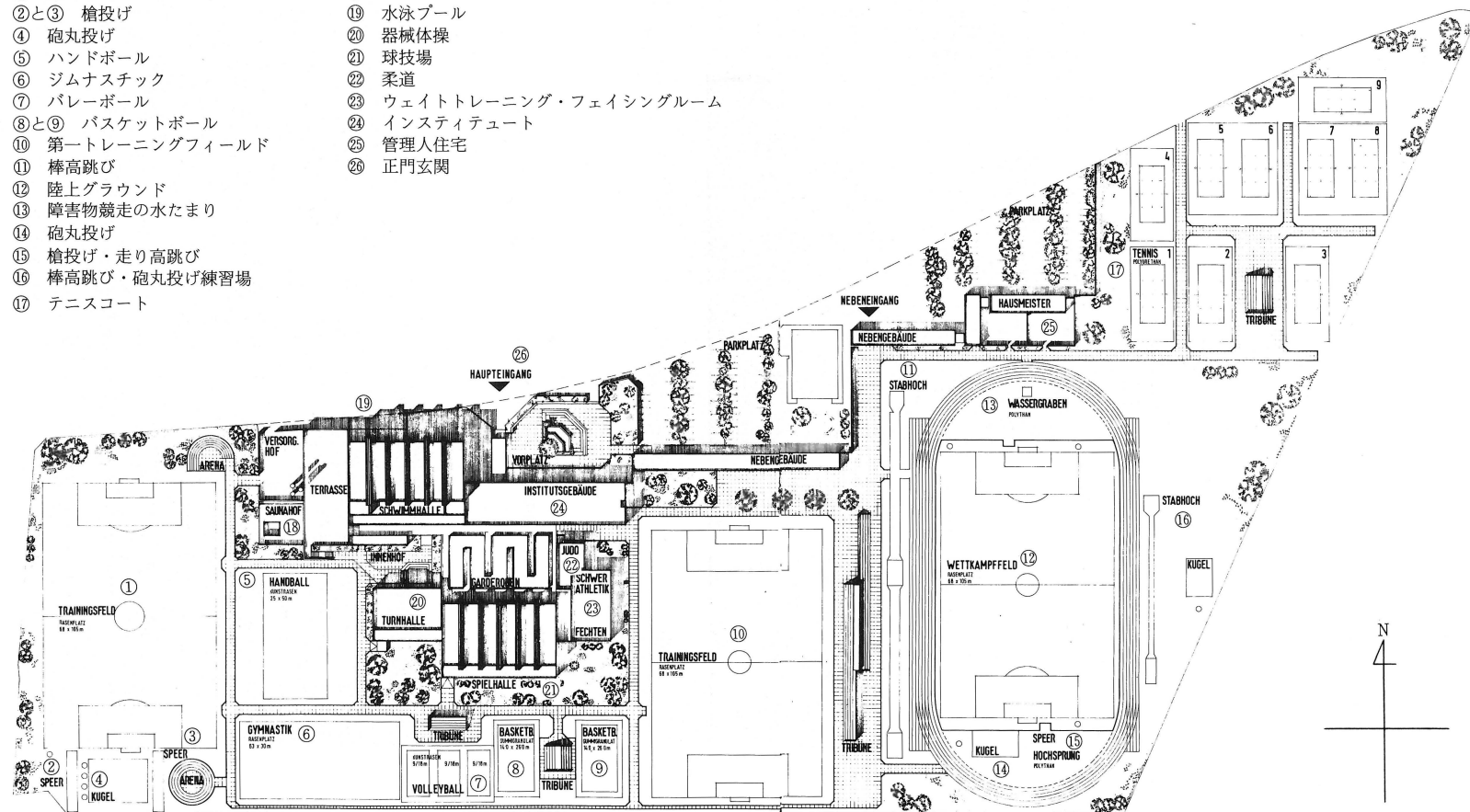
図1 インスブルック総合大学体育施設の見取り図

〈屋外〉

- ① 第2トレーニングフィールド
- ②と③ 槍投げ
- ④ 砲丸投げ
- ⑤ ハンドボール
- ⑥ ジムナスチック
- ⑦ バレーボール
- ⑧と⑨ バスケットボール
- ⑩ 第一トレーニングフィールド
- ⑪ 棒高跳び
- ⑫ 陸上グラウンド
- ⑬ 障害物競走の水たまり
- ⑭ 砲丸投げ
- ⑮ 槍投げ・走り高跳び
- ⑯ 棒高跳び・砲丸投げ練習場
- ⑰ テニスコート

〈屋内〉

- ⑱ サウナ浴室
- ⑲ 水泳プール
- ⑳ 器械体操
- ㉑ 球技場
- ㉒ 柔道
- ㉓ ウェイトトレーニング・フェイシングルーム
- ㉔ インスティテュート
- ㉕ 管理人住宅
- ㉖ 正門玄関



3.65mである。飛び込み台の高さは1m, 3m, そして5m, となっている。プール全体の広さは23.0m×44.0mである。天井には移動撮影のできる設備があり, 2階には50~80名ほどすわれる観覧席が設けられている。スタート台側の方から自然光が入り, 室内がとても明るい雰囲気であった。同施設内には管理室もあり, そのなかに立派な音響装置が設けられていた。残念ながら, 今回はプール施設の地下にある設備調整室が修理中のため見学できなかった。

(2) 器械体操ホール

広さは15.0m×26.0mである。ここではバスケットボールコートが一面とれる大きさである。

写真3 器械体操ホール



写真3の様子はトランポリンの授業をおこなっているところである。フェッツ教授がオーストリア代表元オリンピック体操選手であったためかこの施設にはいろいろ安全性について気が配られている。それは着地時に床から受ける衝撃をやわらげる緩衝作用, 運動動作に適度のはずみを支える反発作用, 振動の減衰作用などの三つの点である。われわれがこのホールに素足で立ったところ, 硬いという感じよりやわらかいという感じを受けた。特に, 床の弾力性の点にわれわれは興味を示した。天井にはつり輪と安全綱が設けられている。写真の左側には器具収納庫がある。右側は壁が強化ガラスになっているので, 外からの光が差し込んで明るい室内であった。

(3) 球技ホール

ここは多目的に使用されている(写真4)。広さは44.0m×24.0mで, 天井から強化ビニール製のカーテンが降りると三面の広さのバスケットボールコートに仕切られる。このカーテンは防音にも役立っている。この体育館ではよく競技会が開かれており, そのための観覧席(写真5)が設けられている。観覧席は壁に備えられたスライド式になっている。それは大人二人

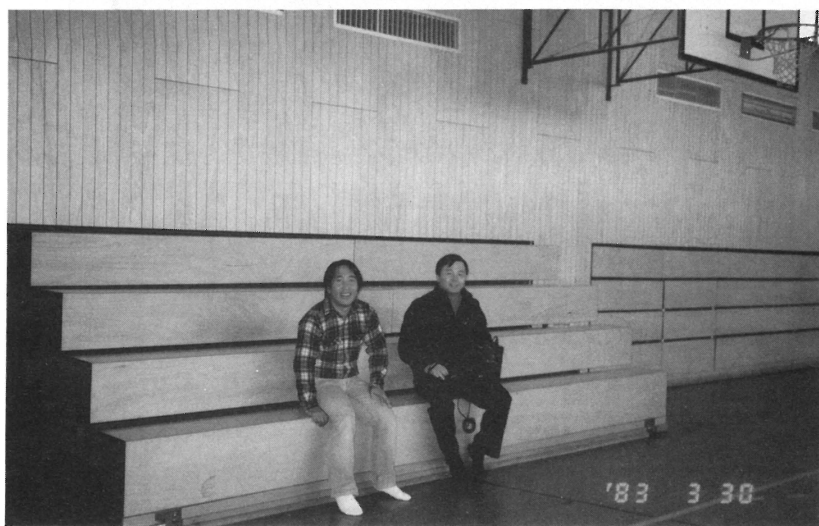
で簡単に引き出せる。席は一行10名ほどがすわれ、四列で4基そろっている。

ここでおこなわれるスポーツ種目はハンドボール、バスケットボール、バレーボール、室内

写真4 球技ホール



写真5 観覧席



サッカー、バドミントンなどである。

(4) その他の屋内体育施設

写真6は、柔道とジスナスティックのホールを示している。床にはタタミが敷いてある。広さは10.0m×10.0mの正方形である。

写真7は、ウェイトトレーニングルームである。最新の器具は見当らなかったが、主要なも

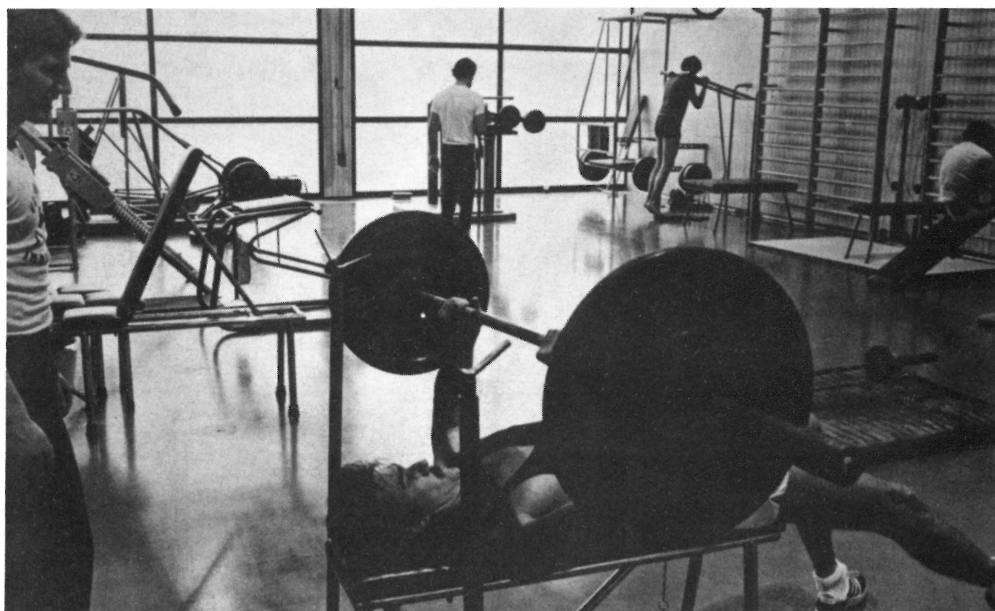
のはそろっており、学生たちが活発に、自由におこなっていた。ここでは、特に床に器具を落してもそれに耐える緩衝作用が働らく。

最後に、屋内施設について特記すべきことはサウナ浴室が附設されていることである。

写真6 柔道・ギムナスティックホール



写真7 ウェイトトレーニングルーム



2. 屋外体育施設

大学体育施設は街の中心部から離れていることもあり、各施設とも十分余裕あるスペースを確保している。すぐ近くにインスブルックの飛行場があるが、大型旅客機は飛んでいないのでそれほど大学の方は音が気にならないそうである。

(1) 陸上グラウンド

陸上グラウンドは1周400mのトラックで、フィールドはサッカーゲームができる広さである。地面はポリウレタン製の材質であり、フィールドには自然の芝が植えてある。われわれがここを訪れたのは3月下旬であったが、すでに雪もとけて芝がきれいに刈り取られていた。陸上グラウンドには棒高跳びバーンとその練習場、砲丸投げ、槍投げ、長距離障害走バーン、走り高跳びなどの施設が完備している。このフィールドの広さは68.0m×105.0mである(図1)。

(2) トレーニングフィールド(第一・第二)

トレーニングフィールドには第一と第二がある。ともに広さは68.0m×105.0mである。ここはサッカーゲームもできる大きさで、多目的に活用されている。地面には自然の芝が植えられており、きれいに整備されていた。

(3) 球技グラウンドとジムナスティック

写真8は、ハンドボールコートである。広さは25.0m×50.0mとなっている。さらに広さ9.0m×18.0mの三面のバレーボールコート、そして214.0m×26.0mの広さのバスケットボールコート、などが隣接されており、それらの地面には人工芝が敷いてあった。また夜間照明施設も併設されていた。ハンドボールコートのそばにはジムナスティックフィールドがあり、広さが63.0m×30.0mである。ここでは女子学生のためのジムナスティック、ダンスなどの実技授業がおこなわれる。地面は人工芝である。

陸上グラウンドの後方には9面のテニスコートがある。この使用料は1時間10オーストリ

写真8 屋外ハンドボールコート



ア・シリング(当時の日本円で110円)で、非常に安いので一般学生にも大いに活用されている。地面はポリウレタン製で、オールウェザーコートである。

Ⅲ スポーツ科学インスティテュート

スポーツ科学インスティテュートはインスブルック大学体育施設のなかにある(写真9)。ここにはインスブルック大学精神科学部体育学科(Leibeserziehung)とスポーツ科学学科(Sportwissenschaft)があり、その学部長および学科長はDr. フリードリッヒ・フェッツ教授が体育教授として任命されている。現在日本では、フェッツ教授の著書が翻訳されている。それらは、「体育一般方法学」(原題: Allgemeine Methodik der Leibeserziehung)*と「体育運動学」(原題: Bewegungslehre der Leibeserziehung)**である。フェッツ教授は1927年生まれで、1952年のヘルシンキ・オリンピック大会にオーストリア代表の体操選手として出場した経験をもつ。

スポーツ科学インスティテュートにおける主要課題は高校教員養成とスポーツ科学の分野における研究活動である(特に、スポーツ教育学((Sportpädagogik))の範囲に重点をおいている)。フェッツ教授は「高度に工業化した諸国が栄養過多と運動不足という大きな危険を認識し、それを克服していくときにスポーツというものはきわめて適切な、しかも最もすぐれたその克服の可能性を提供するものである。スポーツは十分にその役割を果たし、それ自身で障害を引き起こさないためには有能な多くのスポーツ科学者やスポーツ指導者を必要としている。」と述べている**。したがって、ここではそれに答えるべくすぐれたスポーツ科学者およびスポーツ指導者を育成しなければならないという重責がある。1945～1977年の間にインスブルックでは340名の体育指導者が巣立っている。また、何人かは大学に残ってフェッツ教授のもとで研究活動が続けている。現在ここではおよそ300名の学生が勉強しており、彼らの出身地はおもにチロル州であるが、その他フォアアルベルク州などからである。女子学生の比率は全体の34%にあたる。教育課程に入学するには実技適性テストがある(表1)。

写真9 インスブルック総合大学体育施設の正門前



* 阿部和雄訳, プレスギムナスチカ, 1977

** 金子明友訳, 不昧堂出版, 1979

表1 男・女学生向け実技適性テスト例

I. 男子

(1) 器械体操種目

鉄棒：蹴上がり，腕立て前転・後転，開脚跳び越し，後転－後方浮支持回転倒立－前振り
 平行棒：蹴上がり，旋回下り，肩倒立
 跳馬（縦，高さ1.20m）：開脚・閉脚跳び
 床運動：側転（右，左），腕立て回転
 縄登り・降り：5 mの高さ

(2) 陸上種目

100m走：13秒30，砲丸投げ（7.25kg）：7.75m，走り高跳び：1.35m，
 走り幅跳び：5 m

(3) 水泳種目

100m自由形：1分52秒，15m潜水，跳び板飛び込み（3 m）：助走から逆飛び込み

(4) 球技種目

バレーボール：アンダーハンドパスとレシーブ，オーバーハンドパスとレシーブ
 バスケットボール：フリースロー，ランニングシュート，ドリブル・ランニングシュート，
 的当てボール投げ：2回，キャッチボール

(5) 運動系基礎特性テスト

両脚跳び：56cmの高さを14回以上
 腹筋運動：15秒間で11回以上
 腕立て伏せ運動：10秒間で11回以上
 上体そらし運動：10秒間で14回以上
 縄登り降り（高さ4 m）：17秒00
 20m走：3秒05
 立位体前屈：8 cm以上
 100m走：3分18秒

II 女子

(1) 器械体操種目

鉄棒：蹴上がり，逆上がり，腕立て前転，腕立て閉脚跳び
 段違い平行棒：懸垂座から蹴上がり，高棒前転跳びおり
 跳馬（横向き，高さ1.15m）：腕立て開脚跳び，腕立て閉脚跳び
 床運動：前転跳び，側方倒立回転（右，左），後方倒立前転

(2) 陸上種目

60m走：9秒60，砲丸投げ（4 kg）：6.30m，走り高跳び：1.10m，
 走り幅跳び：3.70m，ボール投げ：26m

(3) 水泳種目

100自由形：2分，10m潜水，跳び板飛び込み（1 m）：助走により逆飛び込み

(4) 球技種目

バレーボール：アンダーハンドレシーブとパス，オーバーハンドレシーブとパス，サーブ
 バスケットボール：ドリブル，ランニングシュート，フリースロー

(5) 体操（ジмнаステック）－ダンス－創作ダンス

課題Ⅰ：跳躍－回転－ランニング

課題Ⅱ：ランニングスキャップ－ランニング－ギャロップ

課題Ⅲ：ボールを壁にぶつけながら前転してキャッチする（連続）－リズムに合わせてステップ－
 手拍子に合わせてステップ

(6) 運動系基礎特性テスト

両脚反復高跳び：41cmの高さを10回以上
 腹筋運動：15秒間に11回以上，腕立て伏せ運動：10秒間に8回以上，上体そらし運動：10秒間に11
 回以上，棒登り降り（高さ3 m）：11秒，20m走：3秒50，
 立位体前屈：10cm以上，800m走：3分35秒

学生は実技適性テストを受けて合格すれば、以下二つの学科へすすむことができる。

(1) 体育学科 (Leibeserziehung ((高校教職資格取得課程)))

学習の目標は高校の体育指導者の育成のためのものであり、それを完成することにある。この課程にすすむ学生はこの学科のほかにもう一つの別な学科を自由選択して、これら二つの学科をコンビネーションさせて同時に終了しなければならない。全単位取得後、学生は二つの学科における教職資格試験 (Lehramtsprüfung) を受けて、合格した者は体育と選択した学科の教科を高校で教えることができる。学習期間は各学科それぞれ9学期制 (4年半制) の存学が必要となっている。卒業時に与えられる資格は哲学修士 (Magister der Philosophie) である。

(2) スポーツ科学学科 (Sportwissenschaft)

講義内容あるいは取得単位数は体育学科とほぼ同じである。ただし、体育学科と違うのは一つの学科だけで終了できる。学習期間は前半 (1～4学期制)、後半 (5～8学期制) の二つに分けられている。合計学習期間は8学期制 (4年制) の存学が必要とされている。

オーストリアの大学制度は日本の学年制と異なり、学期制 (Semester) となっている。1年を二つに分け、夏学期と冬学期と呼んでいる。学習期間は各学部によって8学期制 (4年制)、9学期制 (4年半制) とそれぞれ違うが、この数字はあくまでも卒業までの最短年数である。これは、すなわち少なくとも8学期あるいは9学期以上の在籍が義務づけられているということである。それ以上何学期在学して勉強するかは全く学生の自由意志にまかされている。高校教職資格取得課程を専攻している学生の場合を考えると、最短年数で全課程を終える者はごくまれである。学生たちはそれぞれ自己のペースに合わせて単位を取り、卒業するのである。遅い学生は所定の倍以上の時間をかけることがある。何年かけて卒業しようとする上限は定められていないので、日本の大学のように落第、あるいは留年することがない。

Ⅲ 冬季・夏季オリンピック施設

われわれは3ヶ所のオリンピック開催地を車で移動した。オリンピック施設はインスブルックが最初に、ガルミッシュ・パルテンキルヒエ、そして最後にミュンヘンを視察した。

1. 冬季インスブルック・オリンピック施設

アルプスの山々に囲まれたインスブルックの町は冬にはスキー観光客で大いににぎわっている。ここは1964年と1976年の冬季オリンピック開催地として世界的に知られた都市である。当時のインスブルック市長 Dr. ルッガーは、1976年大会ではオリンピックの原点に戻るべく「簡素な競技会」(Einfachen Spielen) をモットーにした。参考までに、1972年の札幌オリンピック大会における総経費は約173億円であった。しかし、インスブルック大会ではその半分以下で約65億4千万円の経費であった。

われわれが最初に訪れたオリンピック施設は街の南にあるベルギーセル・シャンツェで (写真10)、ここには第9回と第12回大会の二つの聖火台が建てられている (写真11)。ベルギーセ

写真10 オリンピック・シャンツェ

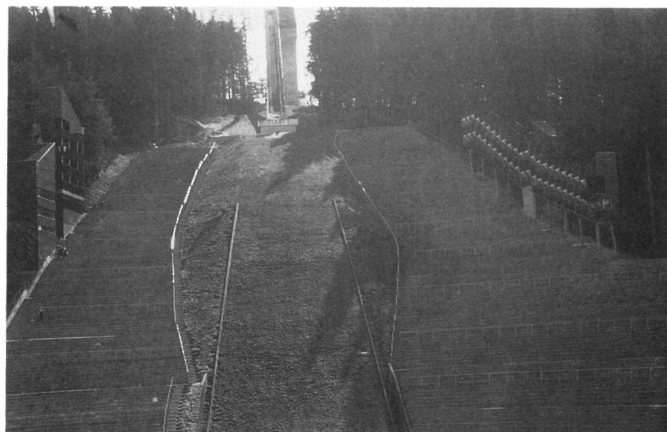


写真11 二つの聖火台

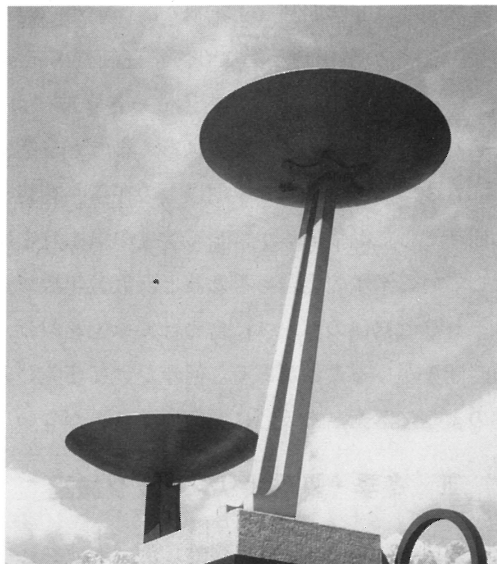


写真12 アイススタジアム



ル・シャンツェは12年前と同じく開会式がおこなわれた場所で、90m級シャンツェである。聖火台には当時のゴールドメダリストの名前が各競技種目ごとに彫られていた。残念ながら日本の選手の名前はなかった。ジャンプの笠谷選手が17位になっただけであった。つぎに訪れた施設はオリンピック・アイススタジアムである（写真12）。当施設は改修工事のために施設内に入ることができなかった。ここではフィギアスケート、アイスホッケー、そして閉会式がおこなわれている。

2. 冬季ガルミッシュ・パルテンキルヒエ・オリンピック施設

ミュンヘンから西南へおよそ90km離れた、ほぼオーストリア国境近いところにガルミッシュ・パルテンキルヒエが位置している。街の雰囲気は高い山々に囲まれ、すでに緑一色の牧野風景がみられ気の安まる想いがした。車で街に入ると、オリンピック施設への標識がいたるところに立っており、外国人のわれわれにも容易に捜し当てることができた。天候がよくなかったので、われわれはオリンピック・アイススタジアムしか訪れられなかった。アイススタジアムは（写真13）、当日施設の事務所が閉鎖されていたが、正門の入口が開いていたのでそのまま中に入ることができた。正門入口すぐにはフロアーがあり、陳列棚が置かれていた。そこには当時使われたスポーツ用具、新聞の切り抜きの記事などが展示されていた。アイススタジアムの収容人数は一万人で、規模の大きなものである。ここでおこなわれた競技はフィギアスケート、アイスホッケーである。ところで冬季オリンピック大会の3回目の参加となる日本選手団の成績については惜しくもジャンプ競技で石黒正次選手が7位であったが、スピードスケート500mの石原省三選手は44秒1の記録で4位入賞を果たした。当時の新聞記事で興味を引いたのは、アマチュア問題である。それは、IOC（国際オリンピック組織委員）が“スキー教師はアマチュアでない”との見解を示したことであった。

3. 夏期ミュンヘン・オリンピック施設

ミュンヘンは人口がおよそ100万人で、札幌よりやや小さな都市である。ここはバイエルン州の州都で、南ドイツのなかで最大の商業都市である。街を歩いていると、古い建物や超近代的ビルディングが入り混じって建ち並び、時折チロルハットにバイエルン民族衣装を着た歩行者もみかけた。商業都市によくみられる忙しい様子はあまり感じなかった。ミュンヘン・オリンピック施設（Olympia Gelände）は北西寄りの効外に位置している。われわれは1964年東京オリンピック施設の代々木競技場や駒沢競技場のようなとても大きな建物を想像していたが、いざゲレンデ内に立ってみると全体が広い自然公園のように思えた。ミュンヘン市が施設建造プランを作成した際大々的におこなう予定であったが、市民は歴史的文化遺産が破壊されることを恐れ、そのプランに反対したために市の郊外にある広大な自然公園を選んだ。この公園は小高い丘や池があり、できるだけそれらの地形にあわせて競技施設が建造された（写真14）。このゲレンデ内には陸上競技場、球技場（バレーボール、バスケットボール、ハンドボールなど）、水泳プール、格闘技場、器械体操などの施設がある。また、選手村も隣接されている。今回見学できた施設は水泳プールで、ほかは閉鎖されており、外観だけであった。水泳プール

写真13 アイススタジアム



写真14 オリンピア・ゲレンデ



写真15 水泳プール施設



施設は（写真15）、われわれが訪れたときに一般市民に開放されており、泳いで様子を眺めることができた。この大会では数々の各選手が誕生しているが、なかでも最も光るのは一人で水泳種目七種目に参加し、7個の金メダルと7個の世界新記録を樹立したアメリカのマーク・スピッツ選手である。施設の建物は壁がすべてガラス張りで、室内はとても明るい感じがした。

オリンピックの日程は1972年8月26日の開会式にはじまり、9月10日の閉会式まで16日間である。ミュンヘン市長 Dr. ハンス・フォーゲルは本大会のモットー「明るく、整然とした大会」を掲げている。大会の組織・運営は成功をおさめた。このオリンピックが残した遺産は「トリム運動」（Do Sport yourself!）による市民の健康維持・増進をはかったことである。それは多くの市民たちにスポーツの重大さを浸透させたことであり、しかもそれが世界的に大きな評価を受けた。

ミュンヘン・オリンピック大会ではわれわれにとって悲しい事件が思い出される。それは大会期間中9月5日のアラブ・ゲリラ事件が起ったことである。アラブ・ゲリラ5人組が突如イスラエル選手団の宿泊する選手村を襲い、平和を願うオリンピック祭典が一瞬に戦場と化し、そして11名の犠牲者を出した。その翌日、6日にメインスタジアムで犠牲者の追悼式がおこなわれ、再び競技会が続けられた。この大会における日本選手の成績は金13、銀8、銅8であった。特に日本選手の活躍した種目は男子の器械体操競技種目で数多くの金メダルを獲得し、男子バレーボール競技種目では初優勝、そしてベルリン・オリンピック大会以来水泳競技種目が金メダルに輝いている。

Ⅳ お わ り に

以上、大学体育施設とオリンピック施設について見聞した資料によって概要をまとめてみた。すでに文中において、われわれが興味深く視察した点を説明済みであるが、次にあげることがわれわれの感想である。

① インスブルックでは今回の視察旅行のなかでわれわれが一番長く滞在できた場所であり、十分に施設見学ができた。インスブルック総合大学の体育施設については全般によく施設設備が整っていて、そして施設管理が隅々まで行き届いていた。屋内体育施設については床などの安全性、観覧席が壁にはめ込まれているスライド式になっており、必要に応じて簡単に引き出せるように合理的な創意工夫がなされていた。広々とした屋外体育施設には主要ないくつかの施設の他に、多目的につくられたトレーニングフィールドが2面も設けられていて、空間の余裕が感じられた。そして屋内でおこなわれる球技種目やジムナスティックなど屋外でもできる場所が併設されていた。このような施設からわれわれはオーストリアにおけるスポーツの重要性を大いに感じとった。

② オリンピック施設については悪天候であったり、時間的余裕がなかったり、また施設が改修中であったことなどの理由から、当初の予定の施設すべては見学できなかった。しかし、実際のオリンピック開催地を訪ねて、少なくともその当時の競技の様子を感じとった。

③ われわれはその西ドイツのフライブルグ大学やオーストリアのウィーン大学の体育施設を訪れたが、限られた紙面のため紹介できなかった。今後機会があれば、これらについても報告したい。

「中世ヨーロッパ3国の教育、体育およびオリンピック施設」の視察研修の成果をわれわれは本学研究紀要において3回にわたって報告したが、まだ不十分な点も多く、一層の学習を深めて、書きたりなかった点などあらためて報告したい。

稿を終るにあたり、この視察旅行に御理解・御援助下さった本学関係の皆さんに、また現地でインスブルック大学のフェッツ教授はじめ他の先生方にいろいろ御協力していただき、心から感謝を申し上げます。

文 献

- 1) 白佐俊憲・加藤満・北村優明：シュタイナー教育を訪ねてー自由ヴァルドルフ学校視察報告ー北海道女子短大研究紀要，第18号，p. 73～90，1984
- 2) 白佐俊憲・加藤満・北村優明：国際児童養護施設（スイス）を訪ねてー「ペスタロッチ子供の村」視察報告ー，北海道女子短大研究紀要，第18号，p. 91～105，1984
- 3) 北海道新聞：第12059号，第16版，1976
- 4) 北海道新聞：第12060号，第16版，1976
- 5) 北海タイムス：第16099号，(5)，1936
- 6) 北海道新聞：第10827号，第16版，1972

(1985・9・10)